



金史良全集

河出書房新社

III

金史良全集 III

昭和49年9月30日 初版発行

編 者 金史良全集編集委員会

発行者 中 島 隆 之

発行所 株式 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町3-6

電話 東京(292) 3711 (大代表)

振替口座 東 京 10802

©1974

印刷・暁印刷 製本・中西製本

定価は函・帯に表示してあります

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

目次

トボンイとペベンイ	梶井陟訳	5
ボットリの軍服	石川節子訳	75
馬息嶺 ^{マシツリ}	李丞玉訳	99
チャドリの汽車	石川節子訳	135
動員作家の手帖	長璋吉訳	147
南から来た手紙	任展慧訳	161
海への歌	安宇植訳	177
解題	金石範	602

金史良全集

Ⅲ

トボンイとペンイ（五幕）

梶井 陟 訳

とき

五十年ほど前の秋(日本の明治時代中期)

ところ

梨の木谷

登場人物

べ座首(六〇)

別名、悪座首(座首は李朝時代の各地方の長官)

その妻(五九)

べベンイ(一八)

べ座首夫妻の娘

トボンイ(二四)

この家の作男

鄭チョン僉知(四〇)

鼻が大きくて醜く別名、ハナ僉知(僉知は爺さんといふところ)

腰の曲がった結婚仲介屋の婆さん

媒婆(六八)

腰の曲がった結婚仲介屋の婆さん

セウォルレ(二〇)

べベンイの女友達

ネウォルレ(一八)

同 右

洪初試(五〇前後)

べ座首家の召使(初試はある程度学問のある人間のことでひや

かし
半分)

金書房(同右)

同 右(書房は官職のない人をその姓の下につけて呼ぶ語)

呉生員(同右)

同 右(生員は平民が官職をもたない学者を呼ぶときに使う)

コブシリ

べ座首家の奴婢

タバンネ

同 右

カムドリ(一五)

近所に住む下級両班(ヤンビ)

その嫁(二〇)

ソブンネ(一九)

べベンイの女友達

老僧

郭風憲(風憲は李朝時代の郷所職の一つで面・里などを取り締った)

巫堂たち

淫売女

その他

村人たち

第一幕

べ座首家の大門外の庭の一隅、塙の下に将棋をさす中年の男たち三人。洪初試は縄をない、金書房はわらじをつくりながら将棋。呉生員はホミ（朝鮮独得の）の柄をなおしながら観戦。鄭食知は大門わきの縁側でシラミ狩り。

洪初試 いや、こいつはえらいこった……おめえがそんな手を知ってるってわかってたら、おらが最初からそう指してたっちゅうに。

金書房 （きつとなつて）なんじやと、そんじや、また「待った」っちゅうのか。

呉生員 そうじやそうじや。おめえ、まさかそんな手で勝とうっちゅうつもりじやあるまいのう？

洪初試 （カッカときて）えい、うるさいわい、横から口出しするな。

鄭食知 ほほう、またケンカが始まりそうだぞ……朝から晩まで賭将棋を指しているながら、酒の一杯も買ってきたとこ見たことねえが……ほれ、また一匹捕めえたぞ。（縁側にシラミを二匹取っ組ませて）

坊さん 坊さん それやれ

のこったのこった はつきよいのこった

金書房 さあ、それじゃもう一度指してみろ。（手をもどしてやりながら）こんど待たしたら承知しねえぞ……

洪初試 （目をパチクリさせながら）ほー、ほんとにおっかねえこった、ほんとに。

鄭食知 よっしゃ、のこったのこった。そのうち仲なりの一杯でも出るかもしれねえぞ。のこったのこった……

洪初試 （用心深く、再び指しながら）こう逃げりゃあ、たぶん大丈夫なはずなんだが……（呉生員を振り返りながら）なあ。

金書房 さっさとやれや。

洪初試 しーっ、ちょっ、ちょっと黙ってるや、黙ってるや、ちゅうに……

トボンイの歌声が聞こえてくる。

鄭食知 あいつ、トボンイの奴め、めしのことでも思い出したのか、今ごろのそのそやってくるらしいぞ。

カムドリ （鬚を結ってある〔結婚すると髪〕を結び上げる）。庭のかどから出て来てチビッ子ども、トボンイが来るぞい、トボンイがー

女兒1 トボンイが？（出て来ながら）あーら、ほんと！

トボンイの総角、チョンガ頭のトボンイ！

女兒2 あたいたちで、からかつてやろうかしら？

カムドリ よっしゃ、まだ一人前に鬘も結えない野郎が、

(女兒たちを振り向いて) おらには大人の鬘がりっぱにあるんだぞい、えーっ。

女兒3 ほれ、来る来る、来るわよ！

一同、稱むらのうしろにかくれる。

呉生員 (簾のへりに出て来ながら) なんにも知らずにやって来るが、あのガキどもにきつとひどい目に合わされるぞ……

トボンイの奴め。

(トボンイの歌声)

おまえのホミは おらがといでやるから

おまえは胸に おらを抱いておくりよ

夜ごと夜ごとに 訪ねていくが

塀めが高くて 越えられぬ

(子どもらのからかう声)

トボン やーい

チョンガ やーい

ワサ ワサ

うわさ！

鄭僉知 まったく……一つ屋根の下に花みてえなお嬢さんをおきながら、十年もたって、これといったうめえ手もみつ
け出せねえでいるくせに、格好だけは一人前だ。あいつの
歌だけ聞いていると、まるで村中の娘を一人じめするみてえ
だ……。

呉生員 おい、見ろや、カムドリの嫁っちょが水を汲んで来るぞい。

一同眺める。

鄭僉知 はー、こいつあまったく見ものじゃが、さよう、あんな口ばしの黄色い奴が、ろくでもねえ嫌らしい野郎のく
せにしゃがって、両班(李朝時代の階級制で、常民に
に対する上流社会の人間をさす)だっちゅう
だけで一人前の面あして嫁っ子さもらいやがって——ちく
しょうめ！

カムドリの嫁 (水桶を頭のにせて登場。若い亭主をこづきながら)
あれをごらん、あれを！ いままで子どもなのね……

カムドリ (振り返り) なんでもまた、そんなやたらになぐるだ？

カムドリの嫁 さっさと行ったらどうなの？

女児たち (うしろを振り向いて)

あまっちょかかっちょ

とりの尻尾 引っぱった

カムドリ ヤー！ このあまっちょら。おらの嫁さんをからかうっちょうのか？

女児一同

亭主の尻^{おしり} びりっくつ

引っくり返して くそっくつ

カムドリ (げんこつを振り上げて) えい！ こいつらなぐられたいのか！

カムドリの嫁 あれまあ、なにバカなことやってるの、さっ

さとお行き！ (せかせかと去る。鄭僉知以下みな笑う)

トボンイ (ホミの柄をかついで、歌いながら登場) へへへ、こいつあおもしれえぞ。どーれ、おらも一口のつてみるか。

(女児たちのあとについて)

黄色い頭に 糸みてえなチョンマゲ

台所のぞいちや おこげちようだい

でれんこ でれんこ

呉生員 はい、あいつは気が確かなのかいな。なんじゃあの態^{まゝ}は！

カムドリ (わざと大人っぽい声で) やいやい、大人の前でなんて態じやい。父ちゃんに言いつけてやるぞ！

トボンイ (にこにこ笑いながら) カムドリのだーんなよ、あんたの父ちゃんは恐かあねえけど、かみさんはおつかねえで、ちよっくらつれてこいや！

カムドリの女房走り出る。ペベンイが垣根越しに見下ろす。

鄭僉知 ほー、あの野郎が、まったく憎まれ口ばかりたたき

やがって……おい、トボンイ、さっさとこっちへ来いや。

女児一同とカムドリ (トボンイのあとについて)

トボンイ トボンイ 嫁さんもらえ

バジ^(ズボ) がないとて もらえない

チュ チュ チュ チュ

兄貴のバジ 借りていけ

キンタマないとて 行かれない

チュ チュ チュ チュ

トボンイ (振り返って) なんだと、このろくでなしどもめ！

一同わつと逃げる。カムドリが転んで泣き出す。

カムドリ アイヤー、痛いよー、痛いようー。

トボンイ (近づいて)

アヤー 痛てて、いてての汁飲んで

赤ん坊なんにん 産んだ

おめえ一人しか 生まれねえ

(片方の足を持ち上げると、カムドリの頭を押えてまたぐ) さっさと行けっ！

ベベンイ (垣根越しに) 気は確かなの！

トボンイ (びっくりしながら) へへ……お嬢さん、見ただかね？

ベベンイ 作男が他人の若奥さんや若旦那をからかったりしてさ、ひどい目に合うわよ。

トボンイ てへー、おらがなんで作男だ、お嬢さんと……

ベベンイ なによ、チョンガなのにそんなこと言っているの！

トボンイ てへーっ、おらがどうしてチョンガなんで……おめえさんがいちばんよく知ってるくせに……

みな笑う。

ベベンイ まあなんてこと……トボンイのノッポとんま！

(拳でなぐる格好をして姿を消す)

トボンイ (追いかけて) お嬢さま、お嬢さまよー (板の間に上がりながら) どうも風向きが悪いと思ったら……

鄭僉知 こいつあほんとに気がふれてるのかもしれないねえど。

お嬢さんのおっしやるとおり……

トボンイ へん、カムドリの野郎、嫁っ子もらったからって、なにを威張ってやがんでえ。

鄭僉知 ところでおめえは、なんでこの炎天下に今まで、モグラみてえに泥んこばっかりほじくってたっちゅうんかね？

トボンイ そんなじゃあどうするっちゅうだ？ 植えたからにや穫り入れしなくちゃあ……

鄭僉知 ほほう、やつこさんの言い種はどうじゃい……みんなおめえのこと考えて言ってるっちゅうのも知らねえで。

トボンイ だからおらも仕事してたけど、考えると腹が立ってきたで、まんま食いにちまっただよ。

呉生員 このアホウー そんなら腹が立たなかつたら、もうちっとで昼飯も食わなかつたっちゅうわけだな。

トボンイ まんまもそんなに食いたかあねえだよ。

鄭僉知 それもそうじゃろ……じゃからわしが言つたとおり
仕事にいかんと、じつと何日でもほつぽらかしときやええ
だ！ 雨が降ろうと雪が降ろうと——な。

トボンイ あつたりめえなこと言うでねえだ。雨の降る日に、
誰が仕事になんか行くもんかね。

呉生員 いちいち言い返しやがって……

鄭僉知 とにかくそうすりや、しまいにやあ悪座首が、娘さ
もらつてくれるって言ってくるだよ。

トボンイ そうか。

鄭僉知 そうかじゃねえだ、わかりきつたことじゃねえか。

その時やあきちんと居すまいだしてな、お嬢さんをくれ
るのかくれねえのか、くれるっちゅうならいつ式を上げる
んか、はつきりさせておかにや。

トボンイ ヒーツ、豚つぶして、牛つぶして……それで祝酒
の一杯にでもありつこうちゅうわけかい……

呉生員 うんにや、おめえにだつて悪かあねえ話じゃる。

鄭僉知 おめえのおかげでおらが一杯ありつけるのも悪かあ
ねえさ。おめえがよけりやええし、おらがよけりやそれで
ええだで。

トボンイ そんでもくれるって言わにやあ？

呉生員 そんでも聞かなかつたら、あのじいさまの鬚つかん
で引きずりまわしてやれや。

鄭僉知 だつたら、みんなオジャンにしようって、何もかも
してやらにやええだよ。一年十二月三百八十日を……

洪初試（見まわしながら）三百六十日じゃ、こいつめ。

金書房 王手じゃよ王手、王手を受けんで何を、たくを並べ
とるんじやい。さつさと指さんかい！

鄭僉知 二十日ぼっちが何じやい。三百六十日なら六十日

……畑を耕し、種を播き、草取りをし、畝をおこし、牛を
飼つて荷物さ運んで、田圃に水つぎ込んで、田植えしてと、
そんでと、もうほかにないかの？

トボンイ わらじさ作つて、縄なつて……と。

鄭僉知 そうじゃ、わらじこさえて縄なつて稲こいてと……
トボンイ こつそりニワトリ捕めえて食つて……

鄭僉知 ほー、こいつがおらをからかうと……ともかく十年
間も骨が碎けるほど働えた分のその賃金を、耳をそろえて
出せて、かみついてやれつちゅうだ！

トボンイ お嬢さんをくれねえなんちゅうことがあるもんか。
お嬢さんがまだ大人になつてねえからだで……

鄭僉知 大人じゃねえじゃと？ 何ぬかすだ、お腕みてえな
胸してて、おまけに壺みてえにでっけえいいお尻お尻してて

ねえだか。

呉生員 十八つていやあもうりっぱな大人だぜ、生みざかりのめん鶏みてえなもんだで……

鄭僉知 フン、まだほんのあまっちゃだど？ そんなら裏山のカルミ谷の、あの阿呆の媒婆が、なんででけえ面して出入りしてゐるだかね。とんでもねえこと考えてゐるだ。ぼやぼやしてゐるともってかれちまうぞ。

洪初試 ほうれ、王手は受けただぞ。いったいどうしたつちゆうだね？

金書房 そうじゃ、そんな手もあるにはあるんじやが。

トボンイ くそ、なんてこった、どうにでもなりやがれ。(ごろんと横になる)

呉生員 そんなことしてると、恋わずらいにかかつて死んじまうだろうぜ。

トボンイ 誰が死ぬつて？

鄭僉知 おめえも死に、お嬢さんも死に、みんな死ぬだ……トボンイ (はっと起き上がりながら) なぜ？

鄭僉知 なぜもへったくれもあるもんかね。セウォルレが嫁にいったらその晩に、金道令(道令は未婚の男子の尊称)が首さくくつて死ぬのを見なかつたんか？ こんなこと知つとるか？ 年とった娘じゃちゆうて水汲みにもやらす洗濯もさせんから

達えなかつたんだとき。

(歌)

十二月なれや 晦日(みそか)の日

向かいの村の 売れのこりの娘

板とびしていて 死んじまつたとき

裏の村の 年とったチョンガ
ブランコにのつて 死んじまつたとき

トボンイ いったいなんのことじやい？

鄭僉知 恋わずらいにかかつて、お互いにせめて顔なりと見たいものと、焦れておつ死んじまつたつちゆうことじやろ……それにくらべりやおめえはまだまだで。じゃが、一つ屋根の下でいつも見つめ合いながら、ベベンイを殺すつもりかね。娘っ子ちゆうものはな、死のうと思えば、ころつと死んじまうもんだで。

トボンイ そいつあふんとか？

鄭僉知 そうじやとも。

トボンイ そいつあえれえこった。

淫売女(体をふりふり登場) あれ、こんなのにんびりと将棋ばかりさしていいいの？

鄭僉知 なんじや、もうおらたちが仕事をするかしないかを、

監視するようになっただか。

淫売女 何がどうしたっていうのよ、このヘナ喰知！

トボンイ ギルジョウイシツジ 吉州明川の丹物屋は、もう商いに出かけちまっただか？

淫売女 (腕まくりしながら) この人たちったら……けんかふっかけるのね。

トボンイ ちがうだよ。(大門に押し入れながら) 毎朝吉州明川の反物屋みてえに、トリが鳴いたからって出かけるなっちゅうから、きいてみたっちゅうわけだよ……(尻をほんと叩いて) さあさあ、どうぞお入り下せえまし。悪座首さまが待っていらっしやるだで。

淫売女 奥さまは？

トボンイ 斧をときにいっしやっただ。斧さ持って、帰ってくる前に、さ、お入り下せえまし。(大門を閉じる)

一同笑う。

金書房 こういう奴をからかうのは、まったくうめえもんだ。
呉生員 そうじゃ、ともかく正直なところ言ってみろや。いったい全体、お嬢さまは何だっちゅうのかい？ ペペンイ嬢さんもそれほどおめえが嫌いでもないっちゅうんか？

いつかあの——桑畑で……

トボンイ (ニッコリ笑って) へえ、おらが夕方まで草むしりしてたところへ、お嬢さんがこっそりとやって来て、ひと休みおし、がしがし働いてばかりいてさ、ノッポとんまっって言うんだ……二言目にはノッポとんまだ。それからホミをほっぽり投げて桑畑ん中へ入っただ。

呉生員 うんうん、ほんでどうしただ。

トボンイ んだからそんな時も、またからかってばかりしいやがって……カルミ谷のお婆ちゃんが入りして、村の朴参奉(参奉は慶・國・宗親府・札賣寺・典獄署などの官庁の(從九品の官職、または成人男子の盲人をさすことば)んちの二男坊との話があっただの、やれ崔進士(進士は科擧の小科)んとこの甚六と話があっただの言いながら、やたらに腹立ててばかりいるかと思うと、今度はまたノッポとんまだ……トボンイ、さあこれでもお食べって言いながら、横っ腹から十五夜お月さんみてえな餅を引っぱり出してくれるで……

鄭食知 うんだ、で、思いきってそこへ押し倒して、うめえことやっただか？

トボンイ んで、しゃくにさわったんで一口に詰め込んじゃっただ！

鄭食知 (口をポカンとあけて) う、う……
呉生員 このきちがいめ！